私たちの霞ヶ浦*

奥 井 登美子

1. はじめに

霞ヶ浦の流入河川は50以上ある。“市民の手による市民のための水質調査”と名付けたきわめて市民的な調査を、この4年間、人海戦術という形で行ってきた。おかげで、この流入河川のそれぞれの川のどこに問題点が潜むのか、かなり把握できるようになってはきたものの、川は生き物である、まだまだ不可解なことがあまりに多い。

2. チョコレートケーキと豚

「天の川(流入河川の1つ、新治村を流れて千代田から霞ヶ浦へ注ぐ)の上流に住んでいる者です。最上流で石を切り出していて、その排水で、川がひどく濁ってしまいました。市民グループで水質調査などをしていてという話をききましたので電話してみました。1度来てみてください」

福田さんのおじいちゃんからの電話がきっかけで、新治村山の荘というところへ行ってみた。筑波山のお隣の山ふところに囲まれ、色とりどりの桃の花が咲いた桃源境とでも呼びたくなるような、美しい部落である。長屋門をめぐるした福田さんの古い、どっしりとした構えの家は、江戸時代から何百年かの年輪を重ねた風格のあるすばらしい家で、庭も山の傾斜面を活かした風情のある庭であるが、木の門が根こそぎひっくり返っていたり、瓦が割れてとび散っていたりする。そのうち、すぐ裏山の石切り場のハッパがなりひびいて、震度が3～4の地震みたいな地ひびきが伝わってきた。この震動でさすがどっしりした構えの家もひんまがり、ガラス戸など1ぺんに6枚も割れたことが

あったという。ひどい震動である。

「うちでも若いもんは、周りの人達に遠慮して何もいわんが、私たち老夫婦は、もうどんな妨害にあってもこわくない。先祖代々、4百年も続いた建物や庭がハッパのおかげでめちゃめちゃになってしまった。」

山と川の美しさをふんだんにとり入れた福田家を、ぐるっとまわるようにして天の川が流れている。その川が時間によって、ひどく白濁するという。透視度計で測ったら3cmであった。何か生物はいないかと、生物調査を行ったが、家庭排水の出口にユスリカの幼虫が1匹見つかっただけ、一見、昔と変わらないように見える川も生物のいない死の川になってしまっていたのである。サワガニやサンショウウオがたくさんいた美しい川だったのに……。川伝いに下流に行く。ふと見ると川の中にビニールパイプが2本つき出している。そのパイプから泡、あわ、アワ……。泡の出所をたどってみると台所と風呂場があった。台所排水、風呂場の排水管を直接、川のまんま中に落としている。生ゴミも川のへりに散乱している。大きな農家で敷地はいくらでもあるのに、川を下水管と生ゴミ捨て場と心得ているらしい。何という心ないことをするのであろうか。その農家の、すぐ隣りに豚を飼っている家があった。たんぼ一枚分くらいの、かなり広い野天の豚のふん尿槽があり、そのふん尿はまるでチョコレートケーキにかけたチョコレートみたいに盛り上がり、今にも流れ出しそうにみえる。側にバキュームカーがおいてあるけれどもバキュームカー1台では、とても汲みきれないほどの量である。よせばいいのに石を投げて

Tomiko Okui

東京薬科大学卒業
土浦の自然を守る会会長
土浦薬剤師会会長
薬剤師

〔趣味〕 絵本 花

野ざらしの豚の屍

* Kasumigaura Our Lake, 昭和61年5月13日受理

豚のふん尿だめ、深さ1～1.5m

みたら、ドボンとすごい音がしてふん尿のチョコレートをつぶり浴びてしまった。どうやら深さもかなりあるらしい。少しでも雨が降れば、オーバーフローしたチョコレートは全部お隣の川に流れ込むしくみになっている。さらにショックだったのは、このふん尿槽の脇に、豚の屍体が12～3頭分、野ざらしのまま積みあげてあったことである。すごい死臭で鼻がひんまがりそうである。こわかったが、近づいてよく見ると、屍体の下にいくつもの豚の頭骨が、ガイ骨となっていっぱい積もっている。かなり長い期間、この場所は野ざらしの豚の屍体の捨て場になっていたにちがいない。病気で死んだ豚を、畠の中に埋めるということもしないで、ボンと捨てておく神経。川の近くにすごい臭気のまま放っておく鼻の持主は、いったいどういう人間なのだろうか、近所の農家のおじさんをつかまえてきいてみた。

「あんなもので驚くこたあないよ、もっとすごいところもあっからなあ……あのバキュームカーだって、ボンコツ屋から古いのもらってきて、汲んでいるふりしておいておだけなのさ。雨が降るの待っていて、みんな川に流しちゃう。」

「霞ヶ浦富栄養化防止条例もあるでしょう。保健所とか家畜保健所とかいうお役所の目もあるでしょう。」

「そんなの何の関係もないよ。雨が降れば流すだけ。上の方から汚い水だから、流さなきゃ損だと思っている。」

3. 上流から汚れてくる水

豚の屍体といい、石切場の水、養豚のふん尿、家庭雑排水のパイプといい、実情を少し知ってみると、霞ヶ浦富栄養化防止条例が施行されて4年もたつというのに、水質が少しもきれいになっていない事実が少しわかったような気がする。水は流入河川の上流からすでに汚れてしまっているのである。こういう水の使い

方、川の扱い方はいったい文化の違いなのだろうか、それともモラルの欠如なのだろうか、私はショックでしばらく考え込んでしまった。黙っているわけにもいなくて、あとで保健所の公害課に通報、保健所の人が見にいったら、豚の屍体は30頭分で、「埋めるなどということは気がつかなかった」といっていたそうである。涸沼川の川原にも、昨年、大きな豚が二頭、ゴロンと捨ててあったのを見たことがある。なんでも県会議員さんだか、村会議員さんだかが関係している養豚場なので、近所の人は知っていても、見て見ないふりをしているという話だった。川原に豚を捨てる。何ともおぞましいことを平気で行う権力者と、それを見て見ないふりをする住民がいる限り、川はいつまでたってもきれいにならないと思う。

霞ヶ浦富栄養化防止条例の適用は44市町村であるけれど、そのうち、市町村の全域で適用は半分くらい、あとの市町村は“ちょっとだけヨ”という有様。これは全面適用にしてほしいと私たち土浦の自然を守る会で申し入れしたにもかかわらず、適用地域を分水嶺で分けた結果である。例えば下館市は、市内のたった50戸だけ、岩間町では山の向こうの分校だけが適用という有様では、市町村の足並が揃わないのも無理がない。44市町村に電話をしてみた。

「霞ヶ浦の水の問題でお聞きしたいことがあるのですが。」

「さあ、ちょっとお待ち下さい。どこの課で扱っているのか調べますから。」

延々とうんざりするほど待たされて、出てきた課が観光課だったり、保健衛生課だったり、その課の中でも係がはっきりしない。またまた待たされて、あげくの果てに課長が電話口に出て、トンチンカンな答をうけたまわるという仕儀となる。市町村にすでに窓口があるか、またはそういう窓口をつくりたいと思っていると答えたのが44市町村中の、たった14市町村であった。

土浦市・阿見町・美浦村・出島村といった霞ヶ浦に面した市町村の霞ヶ浦への対応の仕方と養豚排水、家庭雑排水、流すだけは流すけれども、日常、霞ヶ浦を見ていない上流部分の市町村の対応の仕方にはまるで天と地ほどの開きがある。公害課があって職員も2～3人いて、下水道の普及されていない家庭には、せめてタメマスを設置するようによびかけている浄化に積極的な市もある。

下水道の達成率も土浦市20%、波崎町27.5%、潮来町23.6%、谷田部町23%、牛久町24.6%、千代田村1%、利根町26.6%、神栖町12%、研究学園都市100%、あとは0%である。(研究学園都市の排水は、この都市がで

き上がる前に、霞ヶ浦に流さないようにと陳情した結果、利根川に流している。）

ぼうばくたる平地の、ところどころに小さな森があって、農家が5～6軒、あとは田んぼか蓮田、などという風景のところで、部落と部落をパイプでつなげて下水道を設置するなどということは、素人考えでもおかしい。都市部と農村部と、区別して対策を考えていかないと、敷地がふんだんにある農家で、スイカの皮をビニール袋に入れてゴミ収集車に出すというような農村のおかしな都会化がいたるところで見うけられる。例えば“男女の川”。流入河川のうちの一番美しい川だった。“つくばねの みねよりおつる みんなの川”である。しかし上流部分の川幅50cmという小川までコンクリートのU字管で完全に固められてしまっている。以前は、春の小川はさらさら流る……歌のとおり的小川で、せりやよめな、わらびやぜんまいが川のほとりにたくさん生えていて、それら楽しい植物が、ずい分リンや窒素の吸収に役立っていたと思われるのに、完全コンクリート化された小川は、せりやよめなの姿もなくそのままドブである。県の土木課の人に、なぜこのような川幅50cmのところまでコンクリート化する必要があるのか聞いてみたことがある。洪水の危険性にそなえて断面積を少なくするようにしているという答であった。川幅50cmの川の洪水なんて、家が流されるほどの洪水ではないのだから、せりやよめの方が大事だと、なぜ考えないのだろうか。河川改修工事というのは洪水対策に名をかりた川をドブに変える工事だと思ってさしつかえない。美しかった男女の川もコンクリート化や、ゴミの投棄で、このところずい分汚くなってしまった。政治家は、下水道工事にしても、河川改修工事にしても、お金のかかる工事ばかり問題にするけれど、お金のかからない小さな小さな“小規模処理施設”，タメマス、土壌浄化法、リングレース、フードチェーンリングでも、何でもいい。微生物や植物のもてる力を利用した、素朴で無理のない発生源対策だけが、霞ヶ浦浄化を、可能にしていくのではないだろうか。さまざまな形の小規模処理を数で普及していく方法しかないであろう。

4. 百聞は一見にしかず

一昨年、滋賀県で世界湖沼環境会議が行われた。私たち土浦の自然を守る会から、医者の佐賀さんが出席して「パンツ以外は毎日洗わない」というおもしろなタイトルで発表した。彼は外国の診療所に長くいたせいか、こせこせした日本人の中にいるよりは、外国人とつきあっていた方が生き生きするというユニークな人物なので、外国の学者と夜中の2時まで討論して

しまった……とか。日本人の住民側の出席者として大活躍の形であった。私としても、仲間の一人が忙しくしているというのに、何か手伝ってあげることはないだろうかといろいろ考えた末、佐賀さんのスライドにあわせて、実物のアオコを汲んでいって展示することにした。毎年、夏になると土浦駅のプラットホームは、アオコの異臭に悩まされる。駅のすぐ近くの土浦港には、アオコが堆積して層になり、上の方はもうパカパカに乾いて、ひびわれている有様である。乾くと藍藻類という名にふさわしい藍色となるが、その前はまるでグリーンの蛍光塗料である。成分は栄養たっぷり、国立公害研究所の矢木さんの分析によると、リジン5.76%、ヒスチジン1.53%、アルギニン7.77%、アスパラギン11.20%、スレオニン5.37%、セリン5.17%、グルタミン15.07%、その他グリシン、アラニン、シスチン、バリン、メチオニン、イソロイシン、ロイシン、チロシン、フェニルアラニンなど必須アミノ酸をたっぷり含んだ蛋白質60%である。腐敗した時植物性プランクトンだから植物の腐った臭気だと思うと大まちがひ。蛋白質が腐った時独得の何ともいえない異臭で、それは屍臭に近い。アオコにはミクロキステイスだけでなく、かなり多くの病原微生物が共存しているらしいという説もある。細口瓶で汲もうと思っても、糊状になっているものは汲めないほどドロっとしている。瓶に入れると醗酵してフタがとんでしまうから、ボリの広口瓶に入れて、冷して運ばなくては行けない。佐賀さんがスライドで写したアオコの写真は、なかなかの迫力であるが臭気がともなわない。実物を見てもらうことによってスライドの実感が、よりリアルになると思ったのである。百聞は一見にしかず——アオコを見てしまった人の反応はすごかった。実証精神に富むアメリカ人の学者のポールマン氏とアンダーソン氏は、こんな糊状のグリーンのものが湖全体をおおっているなんて自分の目で確かめるまでは信用できないといって、とうとう佐賀さんにくっついて霞ヶ浦までやって来てしまった。彼らの第一声は「オオ!! ゴッド!!」あとは絶句であった。アオコの実物はいろいろな波紋をなげかけた。大津市民会館の前で、宍道湖漁協の長岡さん達が宍道湖のしめ切り反対のために、特産のシジミを配っていた。私はその隣りでアオコ屋さんをやりながらいろいろな話をした。

「水門を閉め切ってから、何年くらいしてこんなアオコが発生しましたか」

「いま、シジミはどのくらいとれますか？」

「このアオコ、お土産にもって行って、宍道湖も閉め切って淡水化すれば、こうなってしまうかも知れないという見本にみなに見せてやりたいのですが。」

アオコの養子先殺倒。私はいろいろな人と話をしながらアオコを分けた。土浦に帰ってからもアオコをクロネコで送ってほしいという注文がたくさんあって、私はアオコ汲みで忙しい思いをしたのだった。宍道湖淡水化反対運動にとってアオコの持つ威力は、何にもまして大きかったのである。その後、宍道湖淡水化反対市民連絡会の結成に佐賀さんがアオコの写真をもって出かけたり、“宍道湖を守る女の会”や“安来市民連絡会”に私が出かけたりして、反面教師としてのアオコはますます、宍道湖と霞ヶ浦の結びつきを強くしたのである。宍道湖の淡水化賛成派の偉い学者、京都大学の教授が新聞誌上で「アオコが発生するのではないかと騒いでいる住民がいるようであるが、アオコの色は人の心をなごやかにするいい色だ」。落語の子ほめではないが、アオコをほめている学者がいるのにはおどろいた。学者というのは文献上でものをいうおそろしい者だと、私はキモに命じた。土浦では幼稚園生だってアオコの色はいい色だなどとほめる人はいない。環境問題を議論する上で、学者が文献上だけでものをいうことが、どんなにナンセンスなことか、私は痛いほどそれを知ったのである。

5. 水郷水都全国会議

世界湖沼環境会議の第三分科会の中のフォーラムで、せっかくこの分科会で知りあったチャンスを生かしてこれからも情報を交換して、1年に1回くらいは、住民サイドで会議を持とうではないかという決議をした。この情報過多の時代に情報交換もないと思われるかも知れないが、アオコ事件以来、テレビやラジオ、新聞の情報以上に住民同士のつながりの情報がいかに大事であるか、わかったのである。

第一回水郷水都全国会議は宍道湖淡水化反対でゆれる松江で、昨年(1984)の5月、行われた。水とくらし——人と湖の共存を求めて——がテーマであった。そして1985水郷水都松江宣言の中で親水権という言葉が登場した。要約すると、「親水権は水と共存するふるさとを求める権利であり、住民が水都再生の街造りに参画する権利である。わたしたちは魅力ある地域社会を創造するために、親水権の確立をめざして連帯する。1.水面を失わないこと。2.水辺が住民に開かれていること。3.地域開発は水質保全を優先すること。」

第2回水郷水都全国会議は霞ヶ浦で開催することになった。いつにするか、霞ヶ浦の現実を知っていたくには、アオコを見てもらうしかない。アオコの最盛期は8月半ばである。そこで9月6日と7日にきまった。私たち自然を守る会だけでも心細いので、ソーラーシステム研究グループを誘ってみた。このグループは

東京都の保健所に勤めている人の若いグループであるが、なかなかユニークな活動をしている。今まで発行した本が、NHKブックス“都市の水循環”、“都市のゴミ循環”である。このグループとの出会いのきっかけは、私たち水質調査団の中で読書会をはじめたときに選んだ本が“都市の水循環”であった。この本は議論の余地がありすぎて読書会にとってはまことに良い本であった。両国の国技館の雨水を利用した中水道の試みは、このグループの実践活動の1つである。

水郷水都全国会議霞ヶ浦会議を開くにあたって、何かキーワードはないだろうか。みなで考えた結果、河童に登場願うことになった。今どき、なぜ河童などもち出したかという、水というものは、水道の蛇口をひねりさえすれば出てくるもの、それがあたり前の生活の現代人にとって、水は単なるH₂Oという物質にすぎない。しかし、私たちの先祖は、水と人間との間に、河童という奇妙でキテレツな架空の動物を存在させてきたのである。河童はカワウソの化身ではないかという説もある。各地に残っている河童の手のミイラは、カワウソが多いという。それはウソでないらしい。カワウソは、昔は日本国中、いたるところに棲息していたにちがいない。動物作家の藤原英司さんの話によると、性格も案外、ひょうきんなどところがあるという。河童がカワウソであってもなくても、どちらでもかまわれないが、とにかく、水と人間との間に、河童という愛敬のある生物を存在させることによって、水に対するおそれ、おののき、親しみなど複雑で奥深い精神を具現したのではないだろうか。川や沼の危険なところは、必ず河童が棲むといわれていた。骨接ぎを得意とする河童、河童にもらったという家伝の薬を代々大事に伝えている家もある。河童は危険防止の教師であり、医者であり、まじない師でもあったのである。水郷水都全国会議に、あえて、この河童を登場させたのは物質としての水だけでなく、水のもつ深遠な意味を、ここでもう1度考え直してみようではないかという呼びかけにほかならない。利根川には昔から、布川にネネコ河童がいた。ネネコは女だてらに河童世界、全国をまたにかけた女親分で、イタズラのスケールもまた大きかったらしい。ネネコにまつわるいろいろなエピソードは今でも利根町に伝えられている。牛久沼の河童。これは小川芋銭あつての河童である。河童は牛久沼というほど有名になってしまった。霞ヶ浦の周りの水郷地帯いたるところに河童の伝説があったはずなのに、河童をまつることもしなくなった昨今では、どここの河童も精彩がなくなってしまっている。これをチャンスに霞ヶ浦周辺の河童伝説を、徹底的に洗い出すことも必要であろう。その1つとして、土浦佐野子部落

に大切に保存されているカッパの手のミイラを拝ませていただいた。昔は寺だった公民館の中に、うるし塗りの箱に入れられて、鍵がかけられ、めったに見られないようになっている。そのわけは、このミイラを他の部落の人に見せると、必ず洪水が起こるといい伝えられてきたからだった。この部落の洪水の物語はすさまじい。この部落は桜川の水戸街道にかかる銭亀橋の少し上手にある。そのため、銭亀橋と城を洪水から守るために、いつもいつも、部落側の土手が切られ、水の犠牲になってきた。長い忍耐と犠牲の歴史の中で、この部落の人々の心のよりどころは「河童が守ってくれている」だったのである。昭和になってからでさえ、桜川で泳ぐ時、必ず「おら、佐野子の者だよ」と河童に声をかけてから泳いだという。

水害のために3年に1度しか米がとれなかったという貧しい農村は、この霞ヶ浦の周辺には実に多い。この地方の人の精神風土を論ずる中で、一番大きいのは水害ではないだろうか。私みたいに東京育ちの者が、旧い家に入り込んで旧い街に住んでみて「どうして、こういう考え方をするのだろう」不可解なことが実に多い。そういう時、考え方の組み立ての中に、洪水とそれに長い間いためつけられてきた風土を組み入れると少しわかってくるのである。

6. したたかに、ささやかに、ねばり強く

洪水に長い間痛めつけられた人々の“大きな力に反抗しても無駄”といった大きな力に対するあきらめの早さは、天下一品である。例えば、筑波研究学園都市、この広さは旧東京市、つまり山の手線の内側にたとえられる。これだけの広さのところが、さして問題になるようなもめごともなく、この関東平野の中で実現できたという神話は、長いものに巻かれて、その中で安泰でいた方が得だ、大きな力に反抗しても無駄といった歴史の培った住民性が大いにものをいったのではないだろうか。成田空港に着陸する飛行機が、最初に見る湖は霞ヶ浦である。霞ヶ浦は今や日本の玄関と言ってさしつかえない。玄関が、昔の通りの浮世絵の絵のような美しさだったら、どんなにいいだろうか。

長い間、この地方は住民運動不毛の地といわれてきた。保守とひとくちにってしまうのには、あまりに複雑な精神風土が住民運動を不可能にしていたのである。その中で、私たちは住民運動といえるかどうかかわからないが、とにかく市民の生活者としての生活実感の確かさを裏付けにして、小さな運動を展開してきた。これからも、したたかに、ささやかに、ねばり強く、続けていくしかないと思っている。霞ヶ浦が美しい湖にもどる日を夢みながら……。